第６分科会　伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

「ことばを蓄え、ことばを生かす国語教室の創造」

～学び合いのある言語活動の工夫を通して～

１　研究のねらい

平成２５年度全国学力・学習状況調査の結果を受けて、文部科学省・国立教育政策研究所は、「言語文化と国語の特質に関する事項」における指導改善のポイントとして「表現の技法について理解したことを各領域等の指導に生かす工夫・ことばへの関心を高め、言語感覚を豊かにする指導の工夫」を示している。

そこで、本研究では、「学び合う言語活動」を取り入れることで生徒の「ことばの力」を高めることをねらいとしている。「ことばを蓄える」過程においては、表現の技法について理解したことを深めるために「支援の仕方」を工夫し、「ことばを生かす」過程においては、ことばへの関心を高め、言語感覚を豊かにするために「活動内容や学習形態」の工夫を取り入れている。

２　研究の内容（実施　１年）

（１）　授業作りの視点

①　「学び合う言語活動」について

本研究における「学び」とは、「①対象（教材）との対話、②他者（仲間や教師）との対話、③自己との対話」の三つが一体となった活動であると定義する。つまり、他者との協同を通して、多様な考えと出会い、対象（教材）との新たな出会いと対話を実現して、自らの思考を生み出し吟味していく活動である。

「学び合い」の基盤は、「聴き合う」関係に基づく対話的コミュニケーションにある。そのため、すべての生徒が安心して仲間に尋ねたり相談したりできる環境、特に学習内容が分からない生徒が仲間に問いかけ、問いかけられた生徒がそれに誠実に応答することのできる環境づくりを大切にする。

②　「蓄える」過程（支援の仕方の工夫）について

助言の仕方の工夫によって、質問をすることが、学びを深めるために必要であることを理解させ、生徒が安心して教師の助言を求められるようにする。また、ワークシートの工夫も行い、ことばを豊かにするために個人で作成したワークシートを、そのまま班のワークシートに活用できるようにすることで、班員で個人が蓄えたことばを共有できるようにする。さらに、学習用語を提示し、生徒が学習用語を意識して授業に取り組めるようにする。

③　「生かす」過程（活動内容や学習形態の工夫）について

学び合う関係を築くために、意図的に編成した男女混合グループによる協同的な活動の場を組織する。また、ことばの力を高め、対話的コミュニケーション力を発揮させるために、指示やヒントをリーダーだけに提示し、リーダーからメンバーへと伝達させる。

（２）　授業の実際

教材名	学び合う言語活動	蓄える	生かす	主な学習用語

はじめての詩 【１年】	『おれも眠らう』という詩の解釈を考えるための活動において、既習事項を根拠に解読に迫るグループ活動の場を設定した。	○　解読作業に必要な情報を、事前に学習することで、既習事項（作者・助詞・擬音語・歴史的仮名遣い）を考えの根拠とした。	○　詩への苦手意識を取り除き、豊かな表現力を実感させるために、「謎の詩」として解読する活動を行った。	口語詩・文語詩 定型詩・自由詩 擬声語 擬音語 表現技法 歴史的仮名遣い
今に生きる言葉 【１年】	訓読のルールができた経緯を探るための暗号解読の活動において漢字の情報カードを根拠に、「個の考え」を「班の考え」へと発展させるグループ活動の場を設定した。	○　解読作業に必要な「漢字の意味」を一人一字担当して調べ、漢和辞典を用いて漢字の情報カード（読み方・意味・用法）を作成し、その情報を自分の考えの根拠とした。	○　訓読の仕方への苦手意識を取り除き、漢文に親しむ態度を培わせるために、白文を「暗号」として解読する活動を行った。	故事成語 漢文 訓読（文） 白文 書き下し文 訓点 返り点
共通実践事項	○　学習課題を「読み取る」とするのではなく、「解読」とし、「学習の流れ」を「解読への歩み」として提示することで、話合いのための方法を明確にし、生徒の興味を喚起した。 ○　教師の助言を巻物の形にすることで、生徒に興味をもたせ、助言をもらうことへの抵抗感を緩和した。			

３　研究の成果と今後の課題

（１）　研究の成果

①　自己評価の「関心・意欲をもち、学習目標を意識して学習できましたか。」「学習目標に迫ることができましたか。」というどちらの問いに対しても、全員が「達成できた」と答えており、生徒の学び合う言語活動を保証することができ、ことばへの関心が高まったと考えられる。

②　既習事項の確認やワークシートの工夫、事前の調べ学習などを通してことばを蓄えさせることで、ことばを生かす言語活動への抵抗をなくすことができた。

③　アンケート結果において、「今後、あなたは言葉（語彙）を増やす工夫をしようと思いますか。」という問いに対して、肯定的な意見が５０％から８２％へと増加したことから、生徒の「ことば」に対する興味を喚起し、「ことばの力」を高めることにつながったと考えられる。

（２）　今後の課題

①　事後アンケート結果を受けて、生徒の思いを育てるために、「興味」から「確かな力」へと高める手立ての在り方を確認する必要がある。

②　ことばを「蓄える」から「生かす」学習へとつなげる、常時指導の在り方を研究する必要がある。

《参考文献》

○　「中学校における対話と協同」（佐藤雅彰 著　佐藤学 解説、ぎょうせい）
○　「学校改革の哲学」（佐藤学、東京大学出版会）
○　「中学校学習指導要領解説　国語編」（文部科学省、東洋館出版社）